

寺泊町埋蔵文化財発掘調査報告書

向 屋 敷 遺 跡

2000

寺泊町教育委員会

序

平成11年に入り、町道寺泊吉線の改良工事の計画が具体的になり、5月の埋蔵文化財確認調査を経てから始まった今回の「向屋敷遺跡発掘調査」も無事に終了することができました。ここに、その報告書が刊行されるにあたり、関係諸氏の御尽力に深く敬意を表します。

今回調査が行われた大地地内は、かつて寺泊町の水田地帯が信濃川の度重なる氾濫のときにもその災害を免れた場所であったと聞いております。

確認調査、本発掘調査と進むなかで、古代先人たちが生活の場としてこの地を選んだとする証も明かになったのではと思います。

寺泊町には西山丘陵を始めとする丘陵地帯及び島崎川流域は、先人の築いた遺跡が数多く点在しています。最近、隣の和島村をはじめとして、県内の各地に置いて遺跡の調査が行われており、歴史的に重要な足跡が発見されたとの報告がいくつも新聞報道等でも報告がなされております。

近年、社会の急速な変化によって我々の生活環境も大きく変化し、それに伴う開発事業も多く計画されております。これらはまた、先人の文化遺産の破壊の危機であることの裏返しでもあります。

本来、こうした遺跡は、我々郷土の大切な歴史的遺産とし、現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私どもの責務であると考えます。しかし、開発のためやむをえず遺跡に手を加えなければならない場合は、十分な事前調査を行ない、記録保存の形をとらざるを得ない場合も生じます。

今回の調査も、町道の改良工事という、まさに地域住民の生活に避けて通れない開発計画により行なった発掘調査であり、その範囲も必要最小限のものであります。

この調査により、ここに生活した人々の苦労や、知恵、数百年前の人間の生活、さらには当時の社会的環境を偲ばれる思いがいたします。

まさに古代史のロマンを限りなく広げてくれる、町民にとっても夢多い価値ある調査でありました。

詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、今回の発掘調査につきましては、今年度より新規に採用した専門職員の初めての調査であり、また、新潟県文化行政課の諸氏の御指導、また調査に御協力をいただいた方々に改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

平成12年3月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達 栄

例 言

1. 本書は、町道寺泊・長岡線拡幅工事にともなう、向屋敷遺跡発掘調査の報告書である。
向屋敷遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字大地字向屋敷地内に所在する。
2. 調査にあたり、寺泊町役場と事前の協議を実施した。発掘調査の範囲は、道路拡幅部分、及び水路部分の約60m²である。
3. 調査は、平成11年7月22日から同年8月6日までの間、寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）が実施し、同委員会社会教育課主事 八重樫由美子が現地調査を担当した。
調査では、県教育庁文化行政課 澤田敦主任調査員より現地にてご指導いただいた。
4. 出土遺物の整理及び報告書の作成は、平成11年12月から平成12年3月にかけて八重樫がおこなった。
5. 現地調査から遺物整理にいたるまで下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表したい。
阿部 甫・金子繁夫・白井政秋・菅沼利實・土田三四次・中島千代治・野本道彦・早川一郎・
峰島一郎 （敬称略・順不同）
6. 現地調査及び出土遺物について、下記の方々から多大なるご協力と種々のご指導を賜った。
ここにご芳名を記し、心より感謝申し上げる次第である。
春日真実・北村 亮・国島 聡・澤田 敦・田中 靖・戸根与八郎・藤田豊明・藤巻正信・
前山靖明・山田謙治・山田三代次・(有)寺泊測量設計・(有)伊藤組 （敬称略・順不同）
7. 出土遺物は寺泊町教育委員会が保管している。
8. 本書の編集は八重樫がおこなった。

目 次

| | |
|-------------------|----------------------|
| 序 | 寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達 栄 |
| 例 言・目 次 | i |
| I. 遺跡の位置・環境と周辺の遺跡 | 1 |
| II. 調査の契機と経過 | 2 |
| III. 層序と検出遺構 | 2 |
| IV. 出土遺物 | 4 |
| V. まとめ | 8 |

I. 遺跡の位置・環境と周辺の遺跡

向屋敷遺跡は、寺泊町大字大地字向屋敷に所在し、西山丘陵東側より内陸部へと伸びる小丘陵の北縁辺に立地する。「大地」という地名は、その昔、順徳天皇が寺泊で風待ちの滞在をされたおり、ここで狩猟を楽しまれたということから「王地」の表記が正式であるとも伝えられている。一方、『白川風土記』には「大池」とみえる。

遺跡は、平成6年度の分布調査によって発見され、現状の畑の耕作土から平安期の土師器・須恵器片が多く採取された。加えて、この辺り一帯では同時期の遺物が数多く採取されており、従来から遺跡の存在が示唆されていた。しかし、発掘による調査が行われたのはこの向屋敷遺跡が初めてで、そういった意味で今回の資料は貴重である。

周辺の遺跡として、同じ小丘陵の縁辺上に弁才天遺跡が存在する。遺跡発見当時の記録によると、用水路工事中に窯跡らしき遺構が見つかり、窯壁や釉のかかった平安期の須恵器片が出土している。新島崎川を挟んで東側に位置する本山舞台島遺跡では、橋の改良工事中に地下約8mから弥生後期の赤彩土器が出土している。

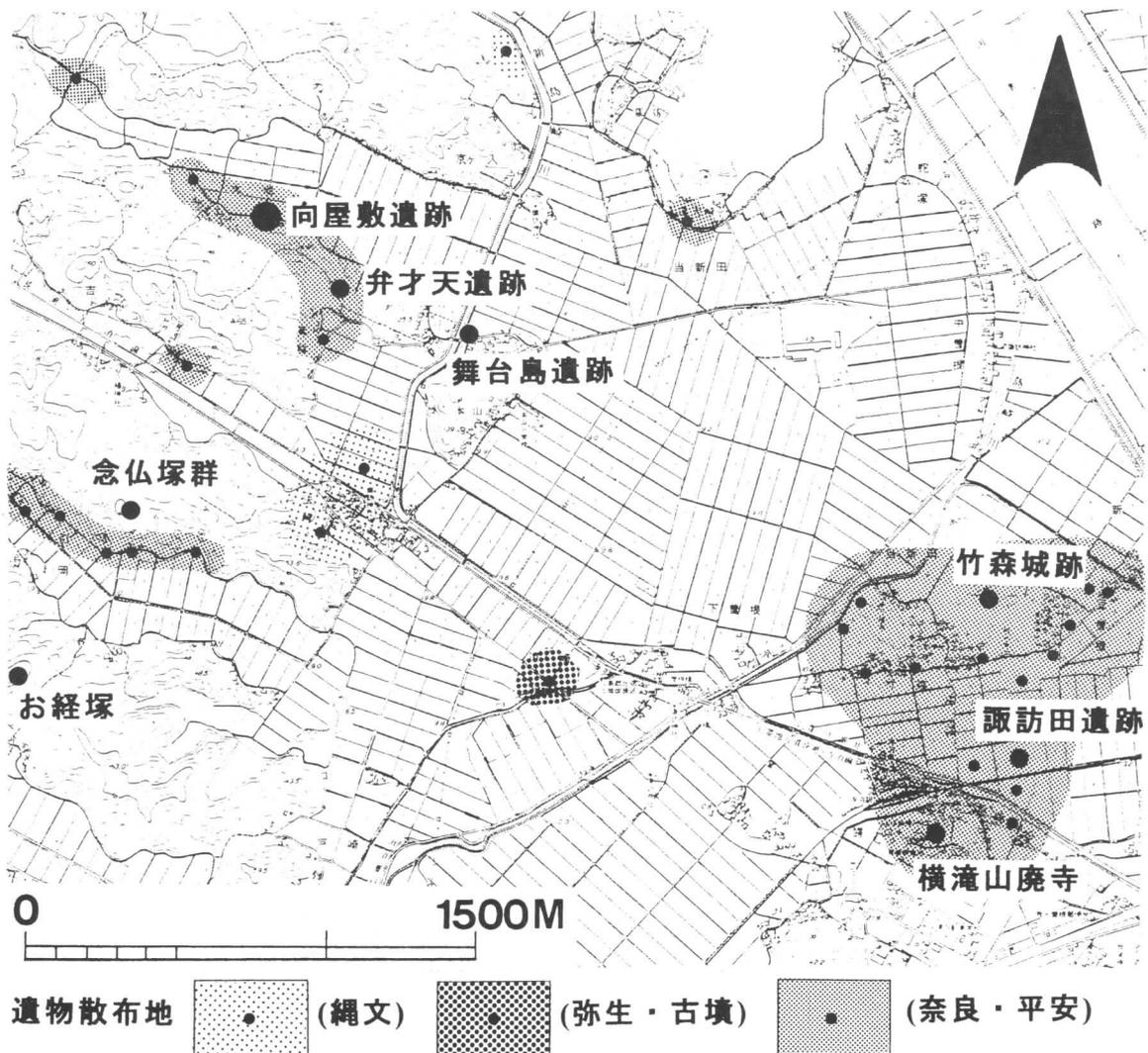


図1 調査区と周辺の遺跡 (S=1/25000)

一方、向屋敷の南東約3 kmには、7世紀後半に想定される横滝山廃寺が所在する。同寺では発掘調査により、東西約12 m×南北約10 mの木造基壇跡が確認され、軒丸瓦及び鴟尾が出土している。またこの北に、古墳時代の玉造関連の諏訪田遺跡が存在し、辺りは町内でも有数の遺跡密集地区である。

II. 調査の契機と経過

平成11年4月、向屋敷遺跡が所在する大地地内を通る町道寺泊・吉線の道路幅拡幅工事計画が明らかになったため、寺泊町教育委員会と事業者である寺泊町建設課との間で協議を進めた。結果、工事計画地内に周知の遺跡があること、また道路という半恒久的な建築物の工事であるという観点から確認調査の必要性が生じた。平成11年5月19・20日の2日間で確認調査を行った結果、9箇所の調査区のうち、向屋敷遺跡の範囲内である2箇所の調査区で、縄文土器及び複数のピットが確認され本調査の必要性が生じてきた。これらをふまえた上で、再度寺泊町との協議を重ねた結果、先の2箇所の確認調査区を中心とした約60 m²を対象に本調査を行うこととなった。調査は、平成11年7月22日～同年8月6日まで行った。現地では、新潟県文化行政課より多大なる御指導をいただいた。以下に本調査の経過を記す。

7月22日 調査開始、バックホーにより表土を除去し、地区割り設定及び標高値の移動。

7月28日 第Ⅱ層を掘り下げ、土坑(SK-1)検出。 7月29日 第Ⅱ層・第Ⅲ層を掘り下げ、土坑(SK-1)を半裁のち作図。 7月30日 土坑(SK-1)を完掘、第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳ層の掘り下げ。 8月2日 第Ⅱ層・第Ⅲ層・第Ⅳ層の掘り下げ、地山面で遺構検出、井戸(SE-1)を検出、半裁する。 8月3日 調査区全体の精査、地山面で遺構検出、井戸(SE-1)の完掘、遺物取り上げ。 8月4日 遺構掘削、全体写真撮影、平面図作成。 8月5日 平面図・土層断面図作成。 8月6日 現地埋め戻し、調査終了。

III. 層序と検出遺構



図2 調査区位置図 (S=1/2500)

道路拡幅中に合わせ約2 m×約30 mの細長い調査区を設定した。総調査面積は60 m²である。調査区の現状は畑地で標高は11～12 mを測る。表土・耕作土に一定量の遺物が含まれており、遺物に注意を払いながら表土・耕作土を約10 cmバックホーで除去し、その後は人力で掘り下げた。

1) 層序 (図3)

当遺跡が小丘陵の縁辺上に立地することから、調査区全体の地山面は小丘陵と同じく南から北へと落ち込んでいくことが確認できた。しかし調査区西端では、逆に北から南に向かって不自然な地山の落ち込みが認められ、過去に何らかの削平を受けていると考えられた。全体の体状況からは、現地形は部分的に削平を受けた後、盛り土によって現在のような畑地の平坦部を呈するようになったと考えられる。今回出土した遺物の多くは、比較的表土に近い盛り土層から出土している。

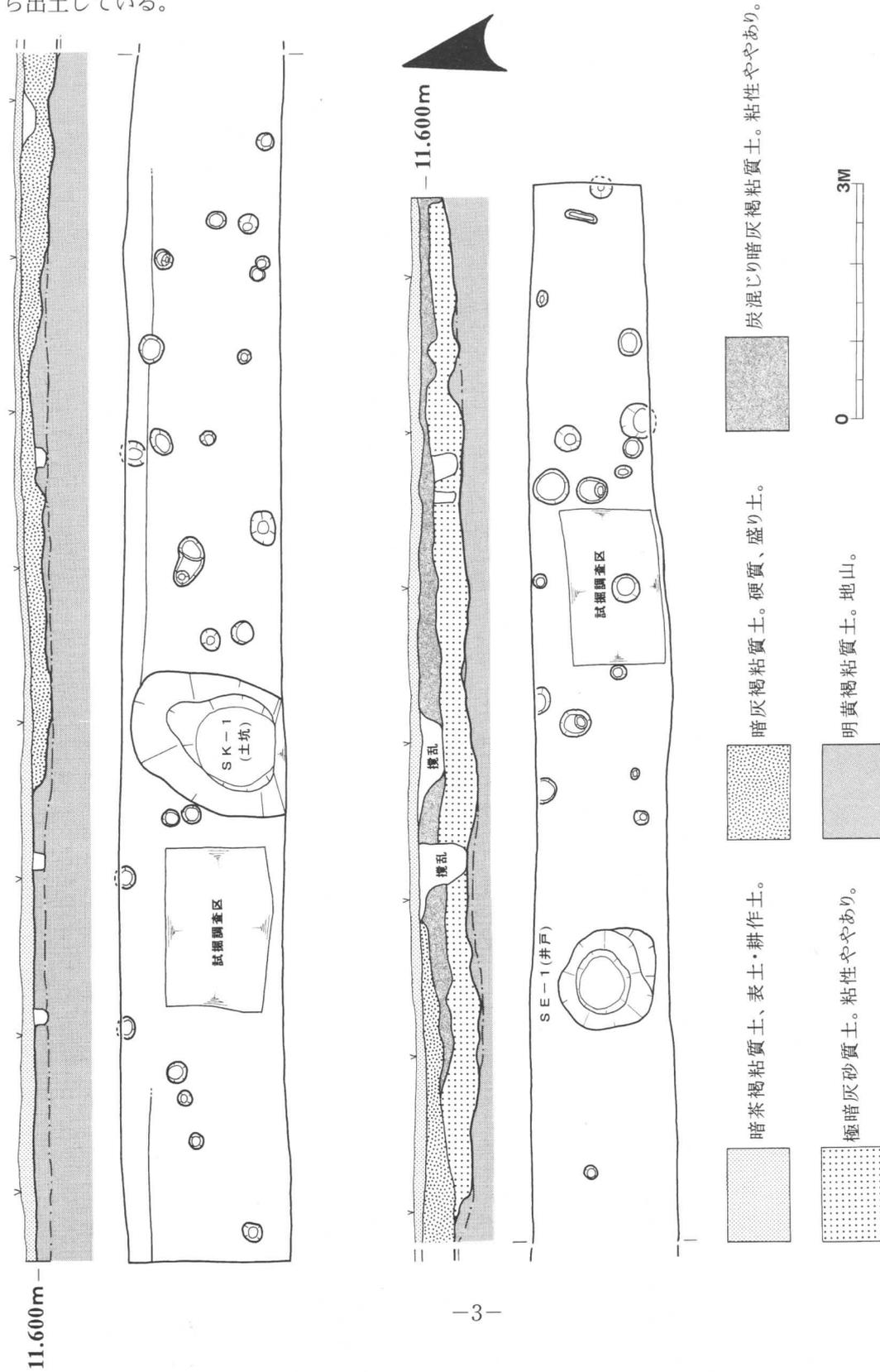


図3 調査区平面図および土層断面図 (S=1/80)

- 第Ⅰ層： 暗茶褐粘質土。表土・耕作土で遺物を多く含み調査区全体に堆積する。
- 第Ⅱ層： 暗灰褐粘質土。硬質、遺物を含む。調査区中央にかけて堆積する盛り土。新しい時期の攪乱を受けている。
- 第Ⅲ層： 炭混じり暗灰褐粘質土。粘性やや有り、遺物を含む。新しい時期の攪乱を受けている。
- 第Ⅳ層： 極暗灰砂質土。調査区東半の地山直上に堆積し、やや粘性が有る。遺構面。
- 第Ⅴ層： 明黄褐粘質土。地山。遺構面。

2) 遺構 (図3・4)

遺構はすべて地山面で検出した。一方、調査当時は認識できなかったが、第Ⅳ層を掘りこむ幾つかのピットが土葬断面図上に確認できる。従って、遺構面は本来第Ⅳ層及び地山面の2面存在したと想定できる。これにより、今回地山面で検出した遺構群は、第Ⅳ層より掘りこんでいたものも含んでいる可能性がある。検出した遺構は、ピット・井戸・土坑である。うち、井戸(S E-1)と幾つかのピットの埋土から遺物が出土した。以下に、個々の遺構について述べる。

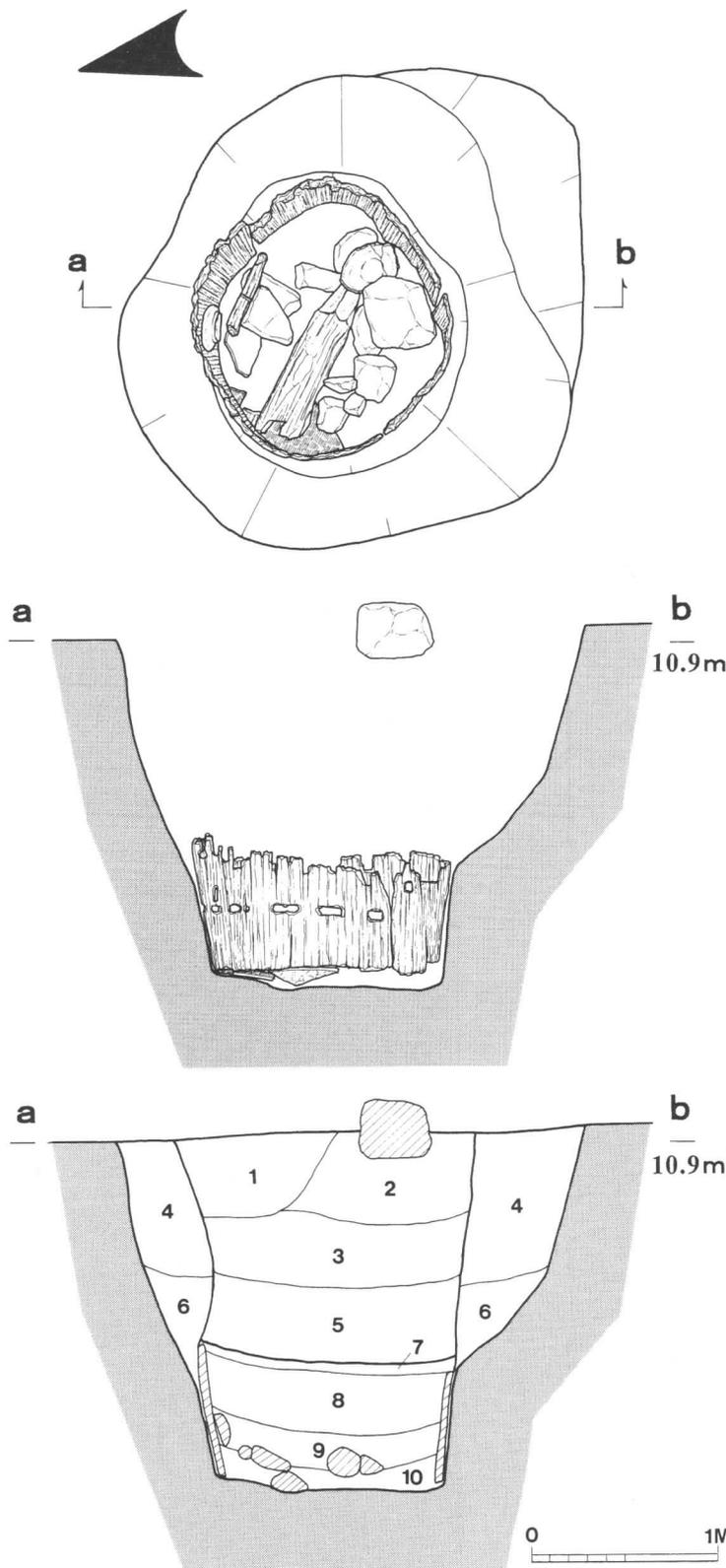
ピット 全部で42基を確認できた。深さは検出面より平均15cmを測り、もっとも深いもので約30cmである。その埋土出土の遺物は、何れも微細であるため、遺構の正確な時期決定は難しい。しかし、比較的平安期の土師器・須恵器片が多く、それを下る遺物がないことから、ピット群の時期は概ね9世紀末以降に帰属すると考えたい。

土坑(S K-1) 調査区西半で検出し、断面は逆台形、地山を掘りこんで深さ約1.5mを測る。埋土はレンズ状に体積しており、その中に遺物は含まれていなかったため時期は不明。その形状と規模、調査中も湧水が著しかったことから、素掘りの井戸である可能性がある。

井戸(S E-1) 調査区東半で検出した。地山面を掘りこんであり検出面からの深さは約90cmを測る。最下部には3枚の平板材を組み合わせて作られた井戸枠が約30cm残存していた。板材には等間隔で方形の孔が並んでおり、この板材が転用部材であった可能性も考えられる。井戸枠の下部からは、珠洲焼きの甕の破片が地山面に敷かれた状態で出土しており、これらは井戸の裏込めとして用いられていたと考えられる。井戸枠内の埋土からは、焼成を受けた川原石や、木製部材、2点の漆器椀が出土している。これらは井戸廃絶後に投げ込まれたと考えられ、井戸枠内最上部は炭化層が薄く堆積している。井戸の帰属時期は、裏込めに使われていた珠洲焼きの甕の年代より、13世紀の後半以降と考えられる。

IV. 出土遺物

調査では、コンテナ約4箱分の遺物が出土した。包含層遺物が多く、縄文土器に至ってはすべて包含層出土である。各個体については、別紙の遺物観察表を参照していただき、ここではその概観を述べる。



1. 暗灰褐粘質土 2. 暗灰褐粘土 3. 灰色粘土 4. 地山ブロック混
 褐色粘質土 5. 暗灰粘土 6. 灰色粘土 7. 黒炭 8. 極暗灰粘土
 9. 炭火泥 10. 青灰粘土

図4 井戸 (SE-1) 平面図・土層断面図 (S=1/40)

1) 井戸(SE-1) (図5)

1～3は、井戸枠の下部と地山面との間に裏込めとして敷かれていた珠洲焼きの甕の破片である。外面は密な平行タタキが施され、内面は押圧痕が並ぶ。吉岡編年[吉岡1994]の第Ⅲ期に該当すると考えられる。

4・5は漆器椀である。4は、出土状態が悪く口径の復元等が困難であった。5は器壁が厚く、平面が楕円型の器形である。底部高台には線刻が見える。これらの時期については、品田編年[品田1997]の越後の第Ⅵ期に相当すると考えられる。6は木製部材である。一方は凹型、もう一方は杭状に加工する。

2) 包含層 (図6・7)

包含層からは、縄文から近世までの土器・石器が出土した。その大半は縄文土器で、全体の約7割を占めている。

7～51は、縄文土器である。36を除いては、概ね北陸の縄文中期前葉の新保・新崎式の範疇で捉えられる。向屋敷遺跡と同時期の遺跡の例としては、西蒲原郡巻町の大沢遺跡第Ⅲ期、あるいは同町豊原遺跡第Ⅶ群があげられる。8～13は、

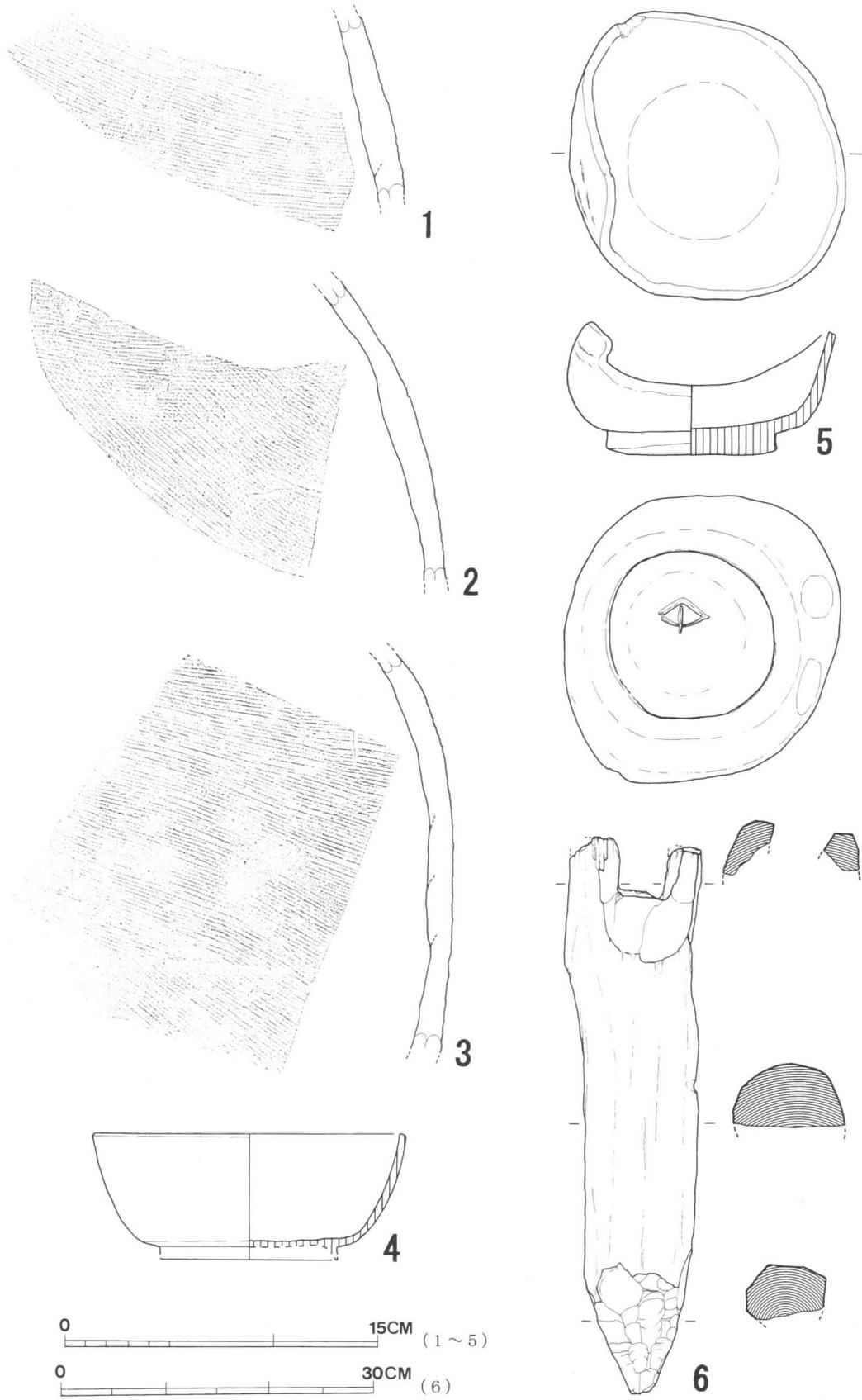


图5 井戸 (SE-1) 出土遺物実測図 (1~3 S=1/4・4.5 S=1/3・6 S=1/6)

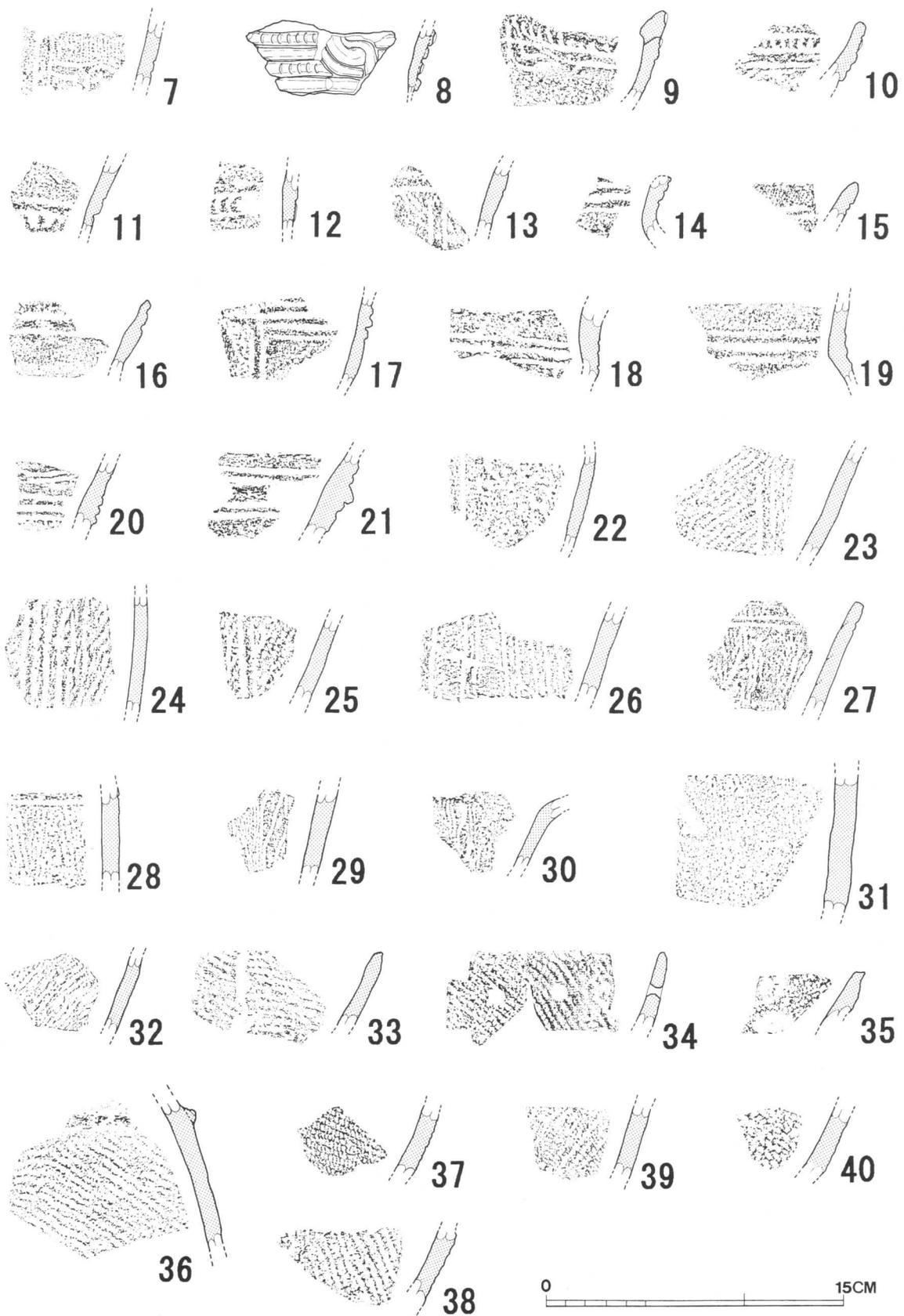


图6 包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)

横方向の隆帯に竹管で刻みを施しており、深鉢の口縁部から頸部に相当する。横方向の区画沈線の一群である14～21も、深鉢の頸部である。21は隆帯上に斜格子の刻みを施してあり、中期前葉末から中期中葉初頭まで時期が下る可能性がある。22～26は、深鉢の体部下半に当たり、縄文施紋後、縦方向の沈線を施している。27～31は、外面に木目状燃糸紋を施した一群である。27・28は、木目状燃糸紋のち横方向の沈線で区画している。特に口縁部の資料である27は、先の豊原遺跡で特徴的なバケツ型をした深鉢に非常に近い要素を備えている。32～40は、体部に縄文を施した一群である。中でも34は、焼成後に2つの補修孔を穿っている。36は、縄文後期の三十稲場式に特徴的な貼り付け突帯に刻みを施した個体で、帰属時期の検討が再度必要である。41は小型の深鉢の口縁部で、縦方向の沈線の間を刻みで充填するという文様構成は、他にあまり見ない。42は、波状口縁であるが最頂部を意図的にくぼませている。43は、口縁部外面に縦方向の隆帯を貼りつけ、そこに刻みを入れている。この種の特徴は、佐渡郡小木町の長者ヶ平遺跡でよく見られるもので、現在のところ寺泊近郊ではあまり確認されていない。44～51は底部で、45の外面には網代痕が看取される。

52～63は、須恵器である。一部を除いて、ほぼ9世紀後半～10世紀初頭に帰属し、佐渡の小泊産が大半を占めるようである。なお、地山面で検出したピットから出土した土器も、この時期に含まれるものが多かった。

64～66は、土師器甕の口縁と体部片で、何れも9世紀後半に相当する。

67～71は、中世土器である。68は外面に弱い平行タタキ、内面に不定方向の粗いハケ調整が施されている須恵質の個体で、帰属は不明である。69～71は、珠洲焼きの播り鉢、甕の口縁である。これらは吉岡編年[吉岡1994]の第Ⅱ期に相当すると考えられ、井戸（S E - 1）出土の珠洲焼きもほぼ同時期のものである。

72は、近世信楽焼きの播り鉢の口縁である。

73～75は石器である。包含層資料のため時期の確定は難しいが、同時に出土している縄文土器の時期が、概ね中期前葉にまとまっていることから、これらの石器も同時期に帰属するのではないかと考えられる。73は安山岩製の擦り石で、表裏面及び側面が研磨によって滑らかになっている。74は、緑泥片岩製の磨製石斧で風化が著しい。75は、安山岩製の石錘である。両側縁を打ち欠いている。74と同様に風化が著しい。

V. まとめ

今回の調査では、包含層からの出土が大半を占めていたのにもかかわらず、比較的時期的にまとまりのある資料を得ることができた。また、当地での遺構の存在も確実となり、今後近辺の散布地を評価する際の良い例となるだろう。縄文土器には、佐渡地方特有の要素を備えたものもあり（43）、この系譜について今後検討を要する。包含層出土の縄文土器は、近所の住民の話から小丘陵の上から流れ落ちてきたものと考えられ、今後小丘陵上に新たな遺跡が発見される可能性もある。また、今回は弥生・古墳時代に相当する遺物がなかったことから、近隣の本山舞台島遺跡（弥生後期）との関係も視野に入れた中で、検討が必要である。

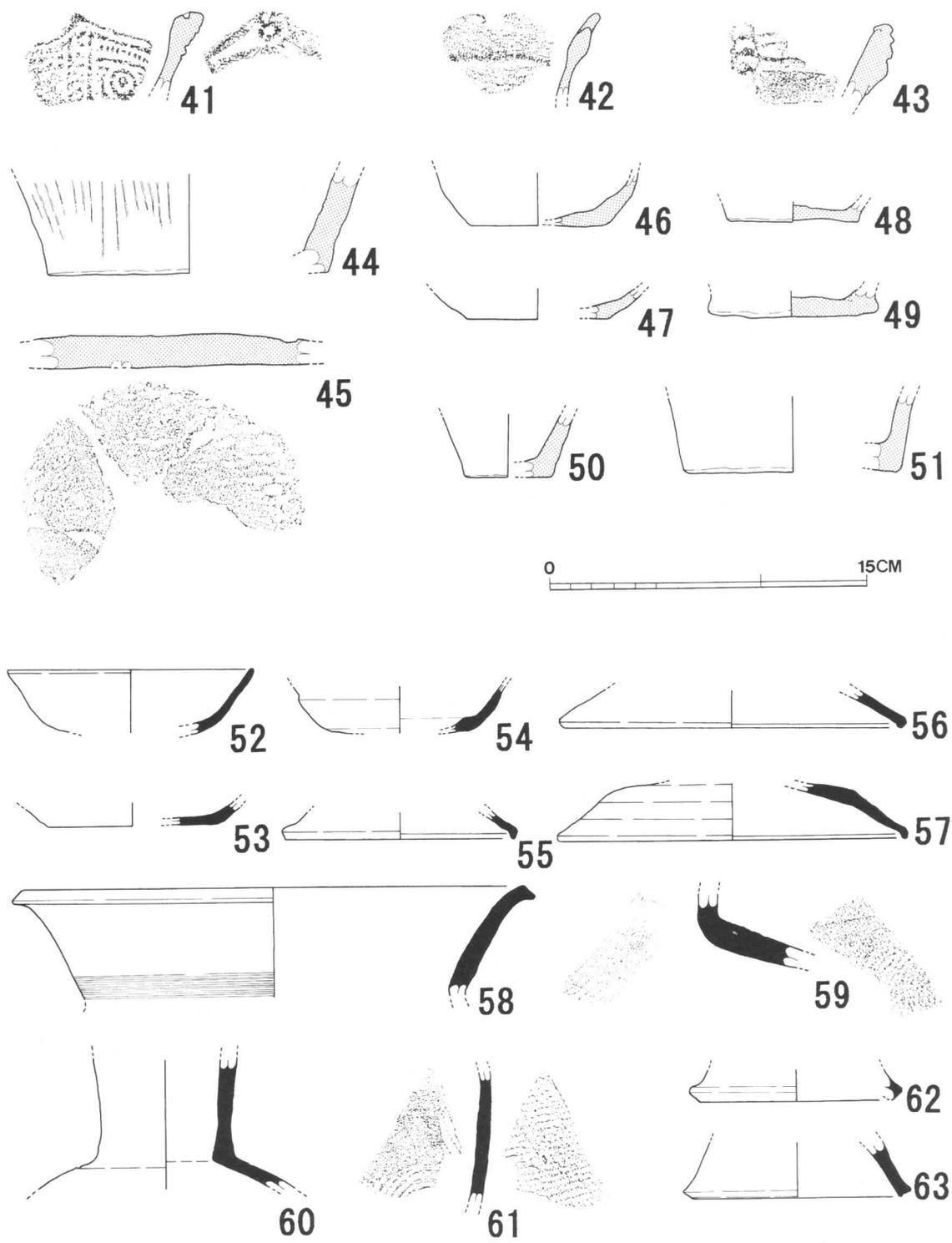


図7 包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)

参考文献

- ・新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所 1989 「山三賀Ⅱ遺跡」『新新バイパス関係発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書53
- ・新潟県教育委員会 1990 『清水上遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書55
- ・吉岡康暢 1994 「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』

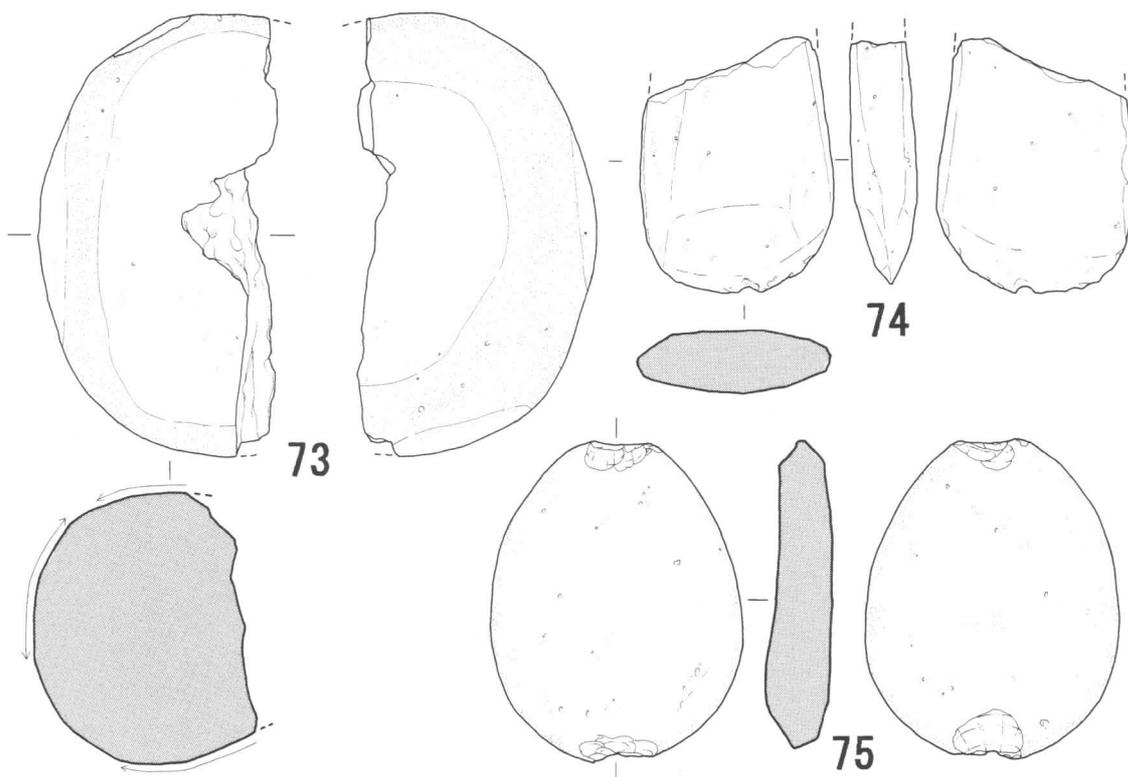
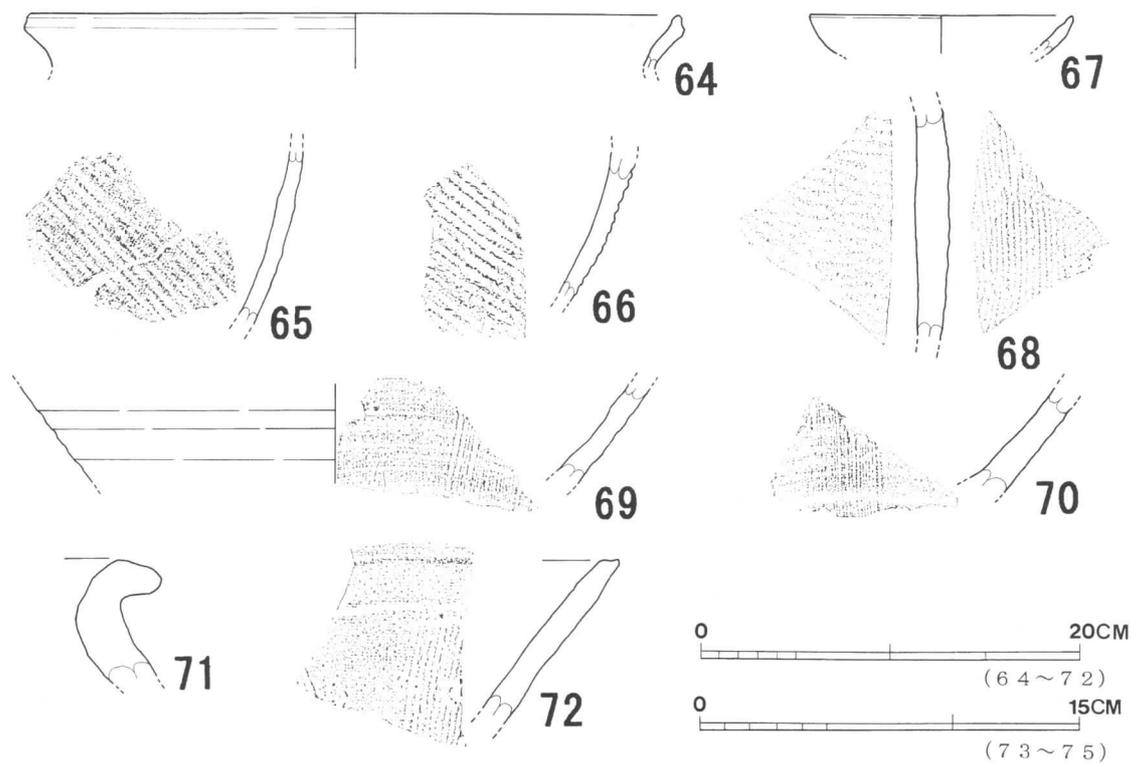
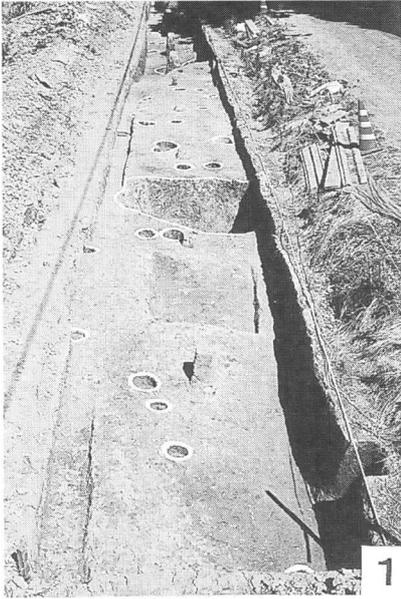
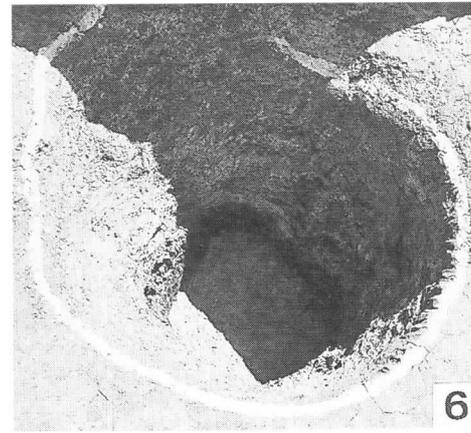
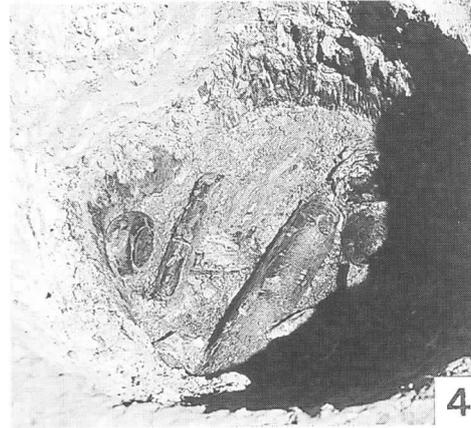


図8 包含層出土遺物実測図3 (64~72 S=1/3・73~75 S=1/2)

- ・ 卷 町 1994 「大沢遺跡」「豊原遺跡」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
- ・ 品田 高志 1997 「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究』第7号
北陸古代土器研究会



1. 調査区全景（西から）
2. 調査風景
3. 土層断面（調査区中央）
4. 井戸（SE-1）漆器椀出土状況（西から）
5. 井戸（SE-1）珠洲焼甕出土状況（南から）
6. 井戸（SE-1）完掘状況（北から）



＜向屋敷遺跡出土遺物観察表＞

| 番号 | 種類 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層位 | 番号 | 種類 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層位 |
|----|-------|-----|----|----|----------|----|-------|------|----|----|-------|
| 1 | 珠洲焼 甕 | 灰 | AA | aa | SE-1第10層 | 37 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | a | 第I層 |
| 2 | 珠洲焼 甕 | 灰 | AA | aa | SE-1第10層 | 38 | 縄文土器 | 明黄褐 | B | b | 第I層 |
| 3 | 珠洲焼 甕 | 灰 | AA | aa | SE-1第10層 | 39 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | b | 第I層 |
| 4 | 漆器 椀 | | | | SE-1第9層 | 40 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | a | 第I層 |
| 5 | 漆器 椀 | | | | SE-1第9層 | 41 | 縄文土器 | 赤黄 | B | c | 第I層 |
| 6 | 木製 杭 | | | | SE-1第9層 | 42 | 縄文土器 | 明褐灰 | A | c | 第I層 |
| 7 | 縄文土器 | 極淡褐 | C | a | 第I層 | 43 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | b | 第I層 |
| 8 | 縄文土器 | 灰褐 | C | b | 第III層 | 44 | 縄文土器 | 極淡褐 | B | c | 第I層 |
| 9 | 縄文土器 | 明黄褐 | A | a | 第I層 | 45 | 縄文土器 | 明黄褐 | A | b | 第I層 |
| 10 | 縄文土器 | 暗灰褐 | C | c | 第I層 | 46 | 縄文土器 | 極暗灰褐 | B | b | 第I層 |
| 11 | 縄文土器 | 極淡褐 | B | c | 第I層 | 47 | 縄文土器 | 赤黄 | A | a | 第I層 |
| 12 | 縄文土器 | 明黄褐 | A | b | 第I層 | 48 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | b | 第I層 |
| 13 | 縄文土器 | 褐黄 | C | c | 第I層 | 49 | 縄文土器 | 明黄褐 | C | b | 第I層 |
| 14 | 縄文土器 | 赤黄 | A | a | 第I層 | 50 | 縄文土器 | 赤黄 | C | c | 第I層 |
| 15 | 縄文土器 | 暗灰褐 | C | d | 第I層 | 51 | 縄文土器 | 明黄褐 | B | b | 第I層 |
| 16 | 縄文土器 | 明褐 | C | c | 第I層 | 52 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 17 | 縄文土器 | 褐黄 | C | c | 第I層 | 53 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第III層 |
| 18 | 縄文土器 | 極淡褐 | A | a | 第I層 | 54 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第III層 |
| 19 | 縄文土器 | 褐黄 | B | d | 第I層 | 55 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 20 | 縄文土器 | 明黄褐 | A | a | 第I層 | 56 | 須恵器 | 灰白 | AA | aa | 第I層 |
| 21 | 縄文土器 | 赤黄 | A | b | 第I層 | 57 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第I層 |
| 22 | 縄文土器 | 明褐 | D | c | 第I層 | 58 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 23 | 縄文土器 | 褐黄 | D | b | 第I層 | 59 | 須恵器 | 灰白 | AA | aa | 第I層 |
| 24 | 縄文土器 | 黄褐 | B | c | 第I層 | 60 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第III層 |
| 25 | 縄文土器 | 明黄褐 | D | b | 第I層 | 61 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 26 | 縄文土器 | 黄 | A | a | 第I層 | 62 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 27 | 縄文土器 | 赤黄 | B | a | 第I層 | 63 | 須恵器 | 灰 | AA | aa | 第IV層 |
| 28 | 縄文土器 | 赤黄 | D | b | 第I層 | 64 | 土師器 | 赤黄 | C | b | 第IV層 |
| 29 | 縄文土器 | 極暗灰 | C | c | 第I層 | 65 | 土師器 | 褐黄 | C | b | 第I層 |
| 30 | 縄文土器 | 赤黄 | C | b | 第I層 | 66 | 土師器 | 極暗灰褐 | C | a | 第III層 |
| 31 | 縄文土器 | 極淡褐 | C | b | 第I層 | 67 | 土師器 | 極淡褐 | C | a | 第III層 |
| 32 | 縄文土器 | 極淡褐 | B | b | 第I層 | 68 | 須恵質土器 | 灰 | AA | aa | 第III層 |
| 33 | 縄文土器 | 赤黄 | A | b | 第I層 | 69 | 珠洲焼 | 灰 | AA | aa | 第I層 |
| 34 | 縄文土器 | 赤黄 | A | a | 第I層 | 70 | 珠洲焼 | 灰 | AA | aa | 第I層 |
| 35 | 縄文土器 | 赤黄 | A | a | 第I層 | 71 | 珠洲焼 | 灰 | AA | aa | 第I層 |
| 36 | 縄文土器 | 赤黄 | A | b | 第I層 | 72 | 信楽焼 | 暗赤褐 | AA | aa | 第I層 |

(凡例) 胎土 AA:精密 A:密 B:やや密 C:やや粗 D:粗
 焼成 aa:堅緻 a:良好 b:やや良好 c:やや軟 d:軟

| 番号 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 出土層位 |
|----|-----|--------|-------|--------|-------|------|------|
| 73 | 擦り石 | 11.6 | 5.7 | 7.1 | 610 | 安山岩 | 第I層 |
| 74 | 石斧 | 6.7 | 5.1 | 1.7 | 95 | 緑泥片岩 | 第II層 |
| 75 | 石錘 | 8.2 | 6.7 | 1.7 | 130 | 安山岩 | 第II層 |

報告書抄録

| ふりがな | むこうやしきいせき | | | | | |
|-------|-----------------------------------|---------------|---------------|--|---|-----------------|
| 書名 | 寺泊町埋蔵文化財発掘調査報告書 向屋敷遺跡 | | | | | |
| 編集者名 | 八重樫由美子 | | | | | |
| 発行 | 寺泊町教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒940-2502 新潟県三島郡寺泊町大字寺泊字磯町7411-14 | | | | | |
| 発行年月日 | 平成12年3月31日 | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 町 | 遺跡番号 | | | |
| 向屋敷遺跡 | 新潟県三島郡寺泊町大字大地字向屋敷 | 59 | 寺泊町 No.235 | 1999. 7. 22) 1999. 8. 6 | 60㎡ | 町道寺泊・吉線 拡幅工事 |
| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 向屋敷遺跡 | 遺物 包含地 | 縄文中期 平安・中世 | 井戸・ ピット | 縄文土器・土師器・ 須恵器・珠洲焼き・ 井戸枠・漆器椀・磨 製石器 | 客土より縄文中期の土器・石器が出 土、平安の土器を埋土に含むピットを 多数検出、珠洲焼きの甕の破片を裏込 め利用した井戸を検出。 | |